

『純潔オメガの誘淫(ハニートラップ)』

著：高月紅葉

ill：篁 ふみ

会場をさりげなく見渡した視線がトウマを見つけた。確かに目が合ったと思ったが、ふいとそらされる。覚えていないのだろうかど不安を感じたが、焦って走り寄るような格好の悪い真似はしない。

数多くのスポット・ハニートラップをこなしてきた。不安も焦りもひっくるめて飲み込み、偽物のため息をひとつこぼして、フロアに背を向けた。

行き先はガラス張りのバルコニーだ。このビルは、サンドラ唯一の高層建築で、三十二階建て。パーティー会場は三十階に位置している。去年はここで花火を見たと思い出し、ガラスに指を押し当てる。

キラキラと光るサンドラの夜景は、民家の多い山の手側がオレンジがかっていて、海岸に近づくごとに色が増えていく。そして、線を引いたように黒く染まる。

そこに海が広がっているのだ。しかし、漆黒ではなく、船の明かりが数えられる。

トウマはこの夜景が好きだった。人々の生活が無秩序に並べられているからだ。そして、自分は闇に沈んだ海に浮かぶ、小さな小舟だと思う。ビルの高層階からでは見えないほどささやかな明かりを灯している。

「……国へ帰ったのかと思っていたよ」

ふいに声がして、ガラス越しに相手を見る。

ジャケットを着ていても堅苦しくなく、滴るほどの色男ぶりだ。近づかれると空気がびりっと震えた。

「サンドラの学生じゃないだろう？ 今夜はパーティーコンパニオンの仕事じゃないんだな」

「あなたはいつ見ても忙しそうですね」

背中を向けたままでうつむき、拗ねた口ぶりで言う。

「フロアを離れてもいいんですか。こんなところでぼくと話していたら、男が趣味だと噂が立ちますよ」

「……物欲しそうに見つめていたのは、きみじゃないか」

気配が近づき、後ろから伸びた両手がガラスにつく。閉じ込められたトウマは前へ出た。

バルコニーの人影はまばらだった。音楽が届かず、装飾もなく、まるで控え室のように味けないからだ。花火が上がらなければ人けがない。

「名前も覚えてないんじゃないですか……」

いつも通りに出したはずの声が震えてしまう。

アルファ独特の気配を感じ、身体の芯がざわめいてしまうせいだ。トウマはフェロモンを完全

に消していたが、これほど強いアルファ性を持っている男にとって、どう感じられるのかは未知数だった。

「名前か……」

トウマをガラスの壁に追い込んだリカルドは、どこか楽しげに笑い声をこぼした。身体に触れることなく、ぴったりと寄り添っている。声が耳元をかすめた。

「アオイ、ユウリ、サイト……」

思いつく名前を並べ立てられ、思わずため息がこぼれた。

「それって、あなたが情をかけてきた相手ですか？」

「いいや。好みのタイプの男には出会ったことがないよ。きみはどうだ、アンリ」

偽名を呼ばれ、顔を上げた。ガラスに映るリカルドと目が合い、トウマは心の中でだけ悪態をついた。想像通りの、プレイボーイだ。口説きの手管をよく知っている。

待っていればトウマから現れることも予想していたはずだ。その予想を裏切らないために、きっちり二週間ぶりに会いに来た。

「あなたに言われると困ります。リカルド。ぼくはずっと前からあなたを知っていたし……」

知り合うきっかけを探していたとは言葉にしない。恥じらって目を伏せるだけだ。

「それなのに、この前は、どうして急に消えたんだ」

リカルドに問われて、素直なふりで答えた。

「……ふたりきりが、恥ずかしくて」

歯が浮きそうなセリフだと、口にしてはいるトウマ自身が寒気を感じる。これで落ちる男がいるのかと思うが、たいがいの相手は引っかかる。

外見のイメージそのままのしおらしさは、フェロモンコントロールの次に重要な武器だ。

「じゃあ、誘うと迷惑だろうか。壁の花でいるぐらいなら、私と海辺を歩こう。ついておいで」

リカルドの気配が背中から離れたかと思うと、腕を引かれる。優しい仕草だ。

「でも、カクテルが、まだ残って……」

まどろっこしいと言わんばかりに舌打ちでもしてくれたら、とトウマは思った。オメガだと気づいているにしては、リカルドの態度はあまりに紳士的だ。普通のアルファはもっと不遜で居丈高だから、調子が狂う。

「貸してごらん」

トウマの手から、グラスがひょいと取りあげられる。リカルドはあっという間に中身を飲み干した。

「ほら、これで問題ないだろう」

おどけてグラスを振る。女たちに囲まれているときには見せない表情を向けられ、アンリを装うトウマは思わず笑ってしまった。

パーティー会場のビルを出て、ゆるやかな坂道をくだっていくと海に突き当たる。観光地のエリアとは違い、防波堤はトウマの目の高さまである。

その向こうに砂浜はなく、消波ブロックが積まれているだけだ。

軒を連ねた店舗はどこも閉店していて、明かりも乏しくムードに欠ける。ふたりのほかに通行人もいなかった。ときおり行き過ぎる車は、帰路を急いでいるのか、猛スピードだ。風を切る音だけが残される。

海の匂いを嗅ぎ取ったトウマは、道路側を歩くりカルドを見上げた。

ここに来るまで続けていた、たわいもない世間話が途切れ、どちらも次の話題を探さないまま、時間だけが過ぎていく。

気が焦らないのは、BGMのような波音のおかげだ。耳を傾けていればいい。

とはいえ、どこまでも歩いていくわけにはいかなかった。

リカルドも同じことを考えたのだろう。足を止め、ジャケットの内ポケットから一枚の紙片を取り出した。

「連絡先だ。退屈な日があったら、電話しておいで」

差し出されたのは名刺だ。携帯電話の番号も記載されている。

「休暇中はサンドラにいるんだろう？」

決めつけるような言葉に、トウマはたじろいだ。一步あとずさると、リカルドが前に出てくる。指先が頬に触れ、首筋までするりと撫でられた。

トウマがアルファ性に気づいているように、リカルドもオメガ性に気づいているはずだが、まるで態度に出さない。会話に出してくれたなら、つがいがいるのかどうかを探れたが、こちらから話を振る段階ではなかった。

ウブなアンリのふりをしているから、あけすけなことは言えないのだ。

「来週末はどうですか？」

リカルドの手に頬を寄せるようにして目を伏せる。

「この前、服をダメにしてしまったでしょう。ジャケットはとても弁償できないけど、シャツぐらいは……」

「気にすることはない。でも、メゾンでデートも、悪くはないな」

「デート……」

トウマが繰り返すと、リカルドは凜々しい眉を片方だけ跳ねあげた。

ふたりの年齢差は三つだが、学生と実業家の隔たりは大きい。リカルドは社会人で、社長としての風格もある。二十八歳とは思えない落ち着きと雰囲気だ。

「デートじゃないのか」

からかうように言われ、促されながらビルへ戻る。

「デートです」

と、坂道をのぼりながら答えた。トウマの誘いは、コンパニオンとしての営業活動に思われているのだろう。

学費や生活費を稼ごうとサンドラへ集まってくる彼らは、パーティーをハシゴして、より金払いのいい相手を探すのだ。

パーティーの主催者に雇われるより、パトロンを見つけて連れ回される方が、ワンシーズンに

高額を稼げる。だから、気になる相手には営業活動をする。

性的指向と相手の性別が異なっても、デートしたり、リップサービスを行ったりすれば、遊び慣れたパーティーピープルなら、ベッドインを迫ることなく、遊び相手として連れ回すだけで小遣いをくれるのだ。

そういった文化も、サンドラに人々が集まる要因だ。人と金が循環するおかげで、この街は廃れることなく、にぎやかであり続ける。

しかし、リカルドがパトロン契約について口に出すことはなく、ふたりはあっという間にビルの前へ帰り着いた。

エントランスには数台のタクシーが客待ちをされていて、パーティーを早々と抜け出したカップルを乗せて走り去る。

「私はもうひと仕事だ。……息抜きに付き合ってくれてありがとう」

まだ宵の口だが、リカルドは『アンリ』をパーティー会場へ戻らせないつもりだ。

トウマは素直に従って微笑んだ。

「いえ、こちらこそ。お会いできて嬉しかったです」

客待ちのタクシーへ近づくと、リカルドが後部座席のドアを開けた。

「来週末までに会うことはあるかな？」

タクシーのドアを押さえたリカルドに尋ねられ、乗り込もうとしていたトウマは背筋を伸ばした。向き直って、まっすぐに見つめる。

「まだ、来週の予定はもらっていません」

さらりと嘘を言う。リカルドの形のいい眉がわずかに動いた。

「純情そうに見えて、手管があるね」

手が伸びてきて、首筋を引き寄せられる。引いた身体がタクシーに当たり、それ以上はさがれない。ロビーの明かりが視界の端に差し込み、腕を組んで寄り添う男女が見えた。きらびやかに着飾ったパーティーコンパニオンと恰幅のいい年配の男。

ピックアップされたのか。そもそも、パートナー契約をしているのか。肉体関係が込みなら『愛人』だ。

気を取られたそぶりで、くちびるを許し、トウマはぎゅっと目を閉じた。演技だった。ウブで慣れない青年のふりだ。

ハニートラップで対象者とベッドインしたことはないが、キスや抱擁、どうしても仕方がないときのペッティングぐらいならギリギリ許せる。

前回もあっさりとかちびるを奪われていたので、別れのキスぐらいならと受け入れたが、思いのほか、くちびるは深く重なった。

「ん……う」

リカルドの息づかいが熱っぽく弾み、下くちびるをねっとりと吸いあげられる。

トウマは拳を握り、ふたりの間にねじ込んだ。けれど、押し戻せなかった。タクシーの屋根に両手をついたリカルドが体重をかけてくる。

強引だが、紳士的な態度は変わらなかった。トウマの息を奪うことなく、やんわりとかちびる

だけが繰り返し押しつけられる。

「……っ、はっ……あ」

思わず、相手のくちびるを食いそうになり、トウマは首を振って逃れた。肉感的な触れ合いに恥ずかしさを覚え、腰の裏がじんわりと熱を帯びる。

揺さぶりをかけられていると、すぐにわかった。だから、絶対にまぶたは開かない。視線を合わせない。

瞳を見つめられたら、強いアルファ性の濃厚なフェロモンを直に感じ取り、トウマは欲情してしまう。

ふたりきりであれば、フェロモンコントロールで対抗できるが、こんな場所では無理だ。とばっちりを食らうのは、タクシーの運転手だろう。

それに、まだ、手の内は見せられない。

「きみはとびきりの美しさだ。個人契約されていないのが不思議なぐらいに」

リカルドの声が頬を辿り、ぎゅっと閉じたまぶたにくちびるが押し当たる。トウマはじっとしているしかなかった。

条件反射で対抗したくなり、ヒートフェロモンが滲んでしまう。けれど、溢れさせることなく、こらえた。

身じろぎもせず、握り締めた両手の拳をリカルドの胸に当てたが、押し返すこともできない。

「まぶたを開けてごらん」

熱っぽく求められたが、トウマは首を振って拒んだ。恐ろしくてできなかった。

触れられた首筋でさえ、アルファの熱を感じて震えている。先ほどまで粟立っていたトウマの肌は、しっとり汗ばみ、潤んでいくようだ。

アルファを受け入れるための、オメガ特有の反応だった。訓練や任務中にも経験したが、やはりどの相手よりも強烈だ。

アルファを前にすると、オメガの性的欲求は増幅する。選ばれるために媚びを売るようで、自尊心の高いトウマには耐えがたい苦痛だった。

リカルドもやはり、トウマがオメガだと悟っているのだ。

ひとつひとつの行動は紳士的だが、ここで攻め手をゆるめるほど優しくはない。

見つめ合うことは、オメガとの相性を確かめるためのマウンティング行為のひとつだ。いくら理知的なアルファであっても逃れられない本能的な性だが、つがいが決まっているオメガであれば臆することなく目を合わせられる。

なぜ、相手に相性やつがいの有無が伝わるのかはわからない。科学的な証明がなされておらず、だからこそ『運命』と表現されるのだ。

見つめ合ったそのときに、相手を欲しいと思う。その瞬間、つがいを持たないアルファとオメガの間には運命が生まれる。もちろん、男女のカップルと同じように、相性が悪くてマッチングしないこともある。現に、トウマはアルファを求めたことがない。

これから先もずっとそうだと信じている。

いつまでも目を閉じているわけにもいかず、トウマは表情を隠すように顔を伏せた。視線を逃

がしながら、ゆっくりとまぶたを開いていく。

アルファの多くは品行方正で、つがいのオメガとも良好な関係を築く。

その優秀さが歪まないように、幼児期から特別な教育と教養が与えられるからだ。

つまり、リカルドが本当に紳士的なアルファであるなら、マフィアの一員になるはずがない。モリスの元に情報が届くこともなかっただろう。リカルドは『悪い男』だ。

裏社会へこぼれ落ちたアルファは享楽を愛し、無秩序の中に人生の美学を感じる。つがいを持ちながら別のオメガを愛すことも、そもそもつがいでない相手を貪るようにもてあそぶこともある。

トウマへ揺さぶりをかけているリカルドも羊の皮をかぶった狼だ。そう思うと、否応なしに緊張を強いられる。無理矢理に踏み込まれる恐怖を押し隠し、アンリを演じてまつげを震わせた。

過剰な反発はしない。それは無意味だ。

冷静に対応すれば、相手がアルファであろうと主導権を渡さない自信がトウマにはある。そうでなければ、この仕事は務まらない。

「……いじめないで、ください」

かよわいふりをしなくても、トウマの声は震えた。

「わかっているんじゃ、ないんですか」

自分がオメガだとは口に出さない。出さなくてもわかるのが、アルファとオメガだ。

「こんなの……、疑われてるみたいだ。個人契約って、愛人の、ことでしょう……」

コンパニオンの個人契約にベッドインが含まれないこともあると知っていながら、トウマは傷ついたそぶりでもちびるを噛む。かよわく無知なふりを装った。

「疑いようがないよ。きみはウブだ」

リカルドの手が、汗で濡れた首筋から離れていく。自分の口元に近づけようとしているのを悟り、トウマはうつむいたまま、リカルドの手首を掴み押さえた。

「イヤだ」

アルファに汗の匂いを嗅がれるなんて、最低だ。性的すぎて耐えられない。

「きみだってわかっているから、近づいたんだろう」

リカルドの手がひるがえり、トウマの指を掴んだ。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>